

Japanese Journal of Ichthyology

Volume VII, No. 1

June 25, 1958

魚類学雑誌

第7卷 第1号

1958年6月25日発行

Published by the Nippon Gyogaku Shinkokai

Tsukiji 5-chome, 1-banchi, Kyobashi,

Tokyo, Japan

魚類の生活色に就いて（第7）

黒田長禮

On the life colors of some fishes—VII

Nagamichi KURODA

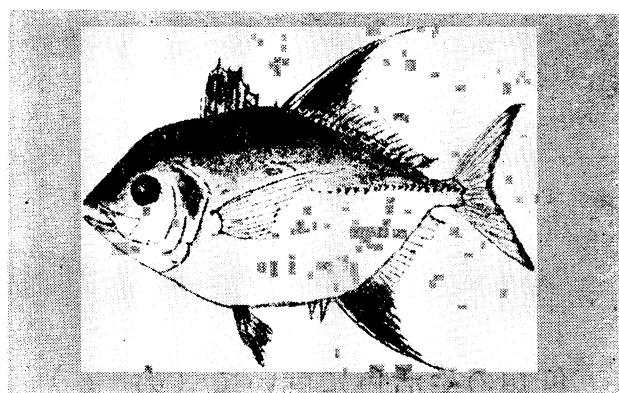
(97) メアジ *Trachurops crumenophthalmus* (BLOCH). 1954年10月13日早朝の志下シラス網にアカカマス、セイゴ(小)などと混入した4尾(方言アオアジ・ヒラアジ)を入手。その一つの測定は全長215mm、体高50mm。新鮮色：虹彩は褐色で大形の黃金色の斑紋がある。背方は暗緑色で、光線により紫色の相当強い光沢がある。側線から尾柄迄(中部では側線より上方)に黃金色の1縦帶(巾5mm)あり〔丁度シマアジかブリに於けるが如し〕、腹方は銀白色に紫色及蒼色の弱い光沢がある。D.とC.は稍々暗色、C.の後縁には細黒の縁がある。味は塩焼として良いがマアジには劣る。

(98) カイワリ *Caranx equula* T. and S. 1946年11月19日志下の夜手縄に入つた稚魚1点(全長44mm)を入手。方言でカクアジ。虹彩は銀色、上方はオリーブ色。成魚よりも一體に淡色で背方は帶黃オリーブ色、体側下方程銀白色で中部は帶黃色で、淡灰色の殆ど見えない程度の7横帶が微かに存現する。頭側と鰓蓋は帶黃銀白色である。ID.は灰黒色、IID.は淡黄色で、上縁に少し黒縁がある。C.は淡黄色で少量の黑色短軸斑がある。P.は淡黄色、V.とA.は橙黄色に僅かに擬黒色の縁がある。A.の基部は白い。

(99) リュウキュウヨロイアジ *Caranx ciliaris ciliaris* (RÜPPELL). 1945年10月22日千本西沖50尋の手縄網中に只1点があり入手した。これについての記載は「生物」Suppl. no. 1: 29(1947)に発表した通りの意見を持つ。体の新鮮色については未発表につき次に記述する。背面はオリーブ色に紫光沢がある。IID.の始めの背部が最も高まり、それから尾柄迄に19個位の黒斑列生し、始め不判明で次第に尾柄近き程明瞭となる。IID.は1棘18軟条で第1軟条は白軸で長く糸状となり、次に大なる灰色斑(境不判明)を有し、短いものはシトロン黄色を帶びる。P.は淡色、V.は短小で灰色に黄を帶びる。IIA.は1棘17軟条で、第1軟条は白色、次に灰色斑があり、短いものはシトロン黄色を帶びること IID.に等しい。C.は黄色、先端と後縁は淡黒色。P.は長く、V.の2倍強ある。虹彩は褐色で1淡黄色斑がある。測定——全長193、体長156、体高63、P.

長 46.5, IID. の第 1 軟条長 65.5, IIA. の第 1 軟条長 55.5 mm.

附記——学士によつては *C. ciliaris*, *C. ui*, *C. plumbeus* [魚雑, ii (3): 131, 1952 参照]



第1図 リュウキュウヨロイアジ 沼津市千本西沖で魚獲（著者原図）

を全部合一してヨロイアジ *C. armatus* (FORSKÅL) とする。松原教授 (1955) は第一を独立種と認めている。

(100) イトヒキアジ *Alectis ciliaris* (BLOCH). 1948 年 7 月 21 日 志下沿岸小地曳にて幼魚 2 点を得。測定すると (単位 mm)

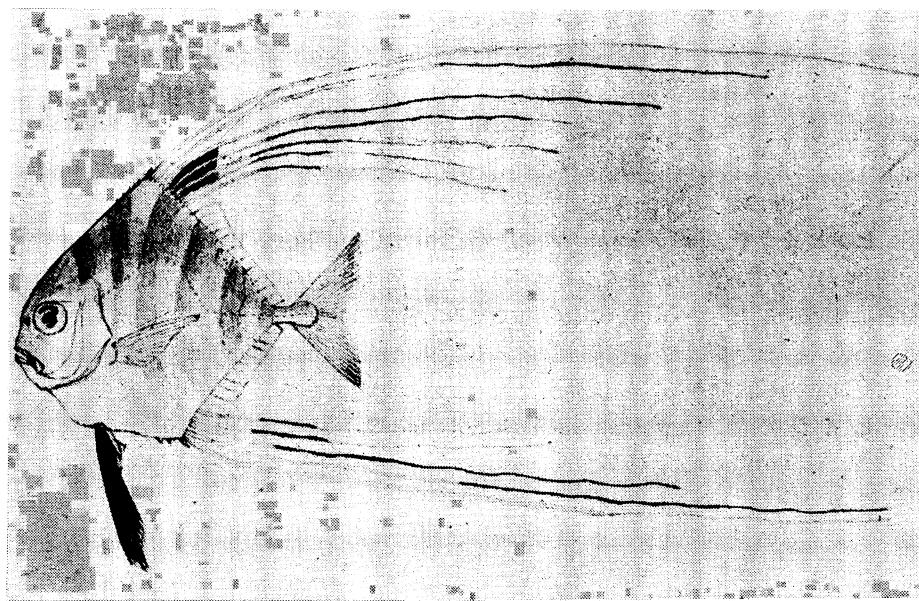
全長上葉端迄	体の最高部	P. の長さ	D. の第 1 軟条長	A. の第 1 軟条長
80	61.5	37	220	168
89	64	27.5	245	190

虹彩は銀色で半輪状をなす黒灰色の 1 斑があり、内細輪は白い。

体は擬菱形或は五角形で、背方は帶灰蒼色、腹方程銀白色となり少しく淡蒼色を帶び、何れも光線により多少の淡紅光沢を示す。体側には 6 灰色横帯があるが新鮮でも鮮明ではない。P. は少し鎌状に近き程度で白色。V. は最後の 2 軟条は膜共に白いが、他は灰黒色が強く、1 標品では短く (27.5 mm), 後方に延ばせば IIA. 始部に達するのみであるが、他の標品では可なり長く (37 mm) 後方に延ばすと IIA. 軟条中部に迄及ぶ。これは個体変化の為めか否かは不明 (体長は 2 点共僅の差あるに過ぎぬものである——上表参照)。C. は上下葉共に上方又は下方に斜向し、又部は凹状をするが浅い。ID. は微小、IID. は変化性があるが大体前方のものが長く、第 1 軟条は灰白色、他のものは黒色部と灰白又は白色部とを有する。第 3~5 軟条膜は蒼黒色で 1 黒斑となる。第 7 軟条迄は長く、以下は短くして白い。IA. 微小、IIA. では第 1 と第 2 軟条と同長例 (168 mm) もあるが、一般には第 1 の方が長い (190 mm) のであろう。第 1 は灰白色、他には D. 軟条同様に黒色部があり、第 5 軟条迄は長く (70~95 mm)、以下は短く白色である。

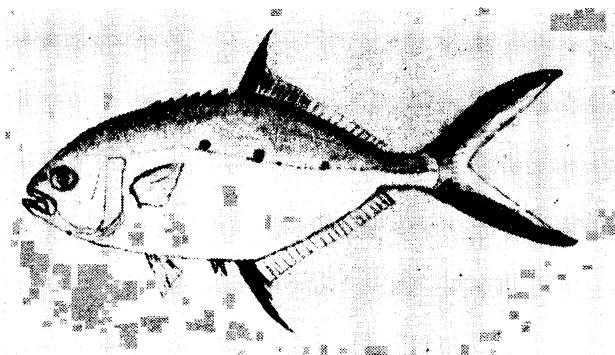
(101) ウケグチコバンアジ *Trachinotus jordani* WAKIYA 1946 年 10 月 13 日 志下沿岸曳網にトウゴロイワシ群中に混在した幼魚 1 尾を入手した。全長 173, 体高 V. 部 46, 同最高 IID. 部 54.5 mm を測る。「動雑」, 61 (5): 137 (1952) に発表してあるが、色彩については大体岡田・内田・松原三氏 (1935), pl. 59, fig. 2 に一致し多少の差があり次の様である。吻から背方は極く淡い蒼色で、大体側線部から上方が着色され、眼下から背方の上部にのみ多少オリーブ色を帶びる。体の残部は光ある銀白色を呈する。側線の多くは上接部に 3 個の濃灰色円点がある〔成魚では

4~5 個の黒褐点があると云う]。前鼻孔と後鼻孔とは接在して同大〔他種では前鼻孔の方が著しく小型〕。下顎は少しく上顎より長い。ID. の棘は濃灰色、IID. は前方のみ黒く、多少鎌状、他は白



第2図 イトヒキアジ幼魚沼津市志下採集、軟条を延ばした図（著者原図）

色。P. は無色透明で、最上条のみ擬黒色。V. は無色透明。A. の 2 離棘は殆ど白色で密接して生じ、前方のものは少し小さい。A. の軟条は前方数条のみ黒く、多少鎌状、他は白色。C. は鉄状であるが先方多少内方に向う傾向を示し、擬黒色で、叉部は著しい白広縁をなしている。A. の鎌状部の方が、D. の鎌状部よりも長い。従来八丈島や小笠原近海から報ぜられたもので、駿河湾ではこの1例の外に大山蒐集品中に牛臥幼2点（1938年8月採、全長40mm）を調査した。



第3図 ウケグチコバンアジ幼魚志下沿岸曳網にて（著者原図）

(102) カンパチ *Seriola purpurascens* T. and S. 1946年9月12日夕刻志下沿岸の地曳網に入つた中幼魚1尾を入手した。全長265、体高P.部67.5mm、ID. VII (第7棘は離在する)。成魚の色は岡田・内田・松原三氏(1935, pl. 56, fig. 1)の図版通りであるが、中幼以下幼魚では体側以下に黄色が多い。尤も幼魚でも稀(?)には成魚と同色の個体を見たことがある。上記標品の新鮮色は、背面は帶紫蒼灰色、頭上方及び吻はオリーブ色。眼後方からの八字斑は濃才

リーブ色〔幼魚では暗褐色で先端オリーブ黄色〕。頭側の大部分は光黃色、上下顎と鰓蓋中央に多少の桃色を帯びる。体側中央に1黄色縦帶があり尾柄に達する。腹方は光黃色が美しく、体側の所々に不判明なる小暗点が粗に散在する。D.は両鰭共大体濃オリーブ色。A.は黄オリーブ色で、外縁に細白縁があり、A.の2小棘は紫色。P.はオリーブ色を帶び先方に桃色を帯びる。V.は赤橙黃色で、先端及び縁は白い。C.は帶赭オリーブ色で、先方は多少赤橙色を帯びる。虹彩はオリーブ褐色に黄を帶び、内細輪は黃金色。又上部のものより小形の幼魚で虹彩は銀色〔背面が他の幼魚より淡色の例〕があり、これにては体側に3縦帶(淡黃色)が存し、中央のものは稍々明瞭であつた。

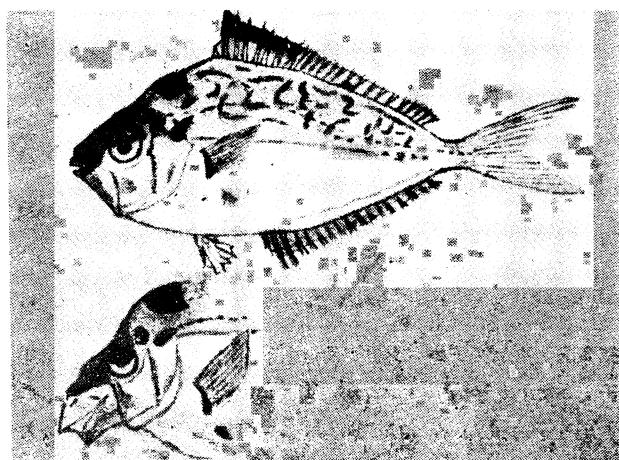
因にワカナゴ(ブリの幼)とカンパチとの味についてはすでに「魚」第5号、1954に掲げてある。

(103) ヒメヒイラギ *Leiognathus elongatus* SMITH and POPE 1946年4月9日伊豆井田沖の手縄網80尋にて漁獲の中幼魚4点入手した。全長60.5, 68, 72.5, 73mm。背面はサバの如き銀蒼色で側線少し上方から下方は銀白色で光る。背方には灰黒色の2縦列斑がある。腹方には微小褐色点がある。腹中線(腹の処丈け除き)は灰黒色。A.の基底に「コ」の字形の1縦黒斑が並び、恰も発光器の様に見える。吻は伸出自在。虹彩は銀色である。

(104) ヒイラギ *Leiognathus nuchalis* (T. and S.) 1945年12月9日志下海岸で成魚1点(全長119、体高42mm)を拾得した。従来発表の体長は61~100mm(諸氏による)とあるから今回のものは最大といえる。

新鮮色——額から頭上(凹状)はオリーブ色、後頭に黒褐色の1大斑があり、眼後方と鰓蓋後骨上縁にも暗色斑各々1個ある。背方は帶蒼銀白色、鰓蓋から体側並びに腹面は光銀白色で、腹方黄味を帯びる。側線の上下には多少オキヒイラギ(*L. rivulatus*)に見る如き不規則な黄褐色の虫喰状斑があり、最下(体側中央)に黄褐色の細縦線があり、最後方は点斑となり、終に尾柄に至り消失する。D.第2~6棘の上縁の膜には1黒斑が顯著にあり、次に第6~8棘の上方に美小澄黃色斑がある。A.は淡澄黃色、P.は淡黃白色、V.は無色、C.は淡黃色である。P.基底は暗色、その下方にも1黄褐斑がある。

以上の内、体側に虫喰状斑のあることは田中博士、岡田・内田・松原三氏の各著書の図版には認められざるか或は微かにあるにすぎず、只宇井氏のみ「背部には淡き橙色の斑紋を現わしている」



第4図 ヒイラギ成魚全長119mm。体側上半に虫喰斑明晰にある例、下図は吻を伸した図 志下採集(著者原図)

と記述してある。今回のは特に目立つた虫喰斑の現われた例であつて、個体変化の1例か、老成魚のためか、将た又極めて稀な例かと思う。

(105) イシダイ *Oplegnathus fasciatus* (T. and S.) 1948年8月10日伊豆西浦方面(田方郡)で漁獲の亜成魚全長上葉端迄370mm、体高144mmのものでは吻は下顎部と共に真黒か又は擬黒色、鰓蓋後端とP.基底とに各々1大黒斑がある。体色は岡田・内田・松原、pl. 86, fig. 1に等しいが黒横帶は消えて存在しない。

又同時に得た別の亜成魚全長280、体高120mmのものでは上記のpl. 86に等しく、灰黒色横帶6個あつて、過眼帶は消えている。虹彩は今回の2例共に淡灰色でそれに暗褐色汚点があり、内細輪は擬白色である。

1948年8月13日に西浦方面で漁獲の成魚全長395、体高150mmを調べた。これは上記8月10日の亜成魚に等しいが灰黒横帶は5個を微かに存することは岡田・内田・松原、pl. 86, fig. 1に全く一致を見る。虹彩は暗褐色、内細輪黄白色。

因に最大は蒲原博士によれば600mmに及ぶと云う。

(106) イシガキダイ *Oplegnathus punctatus* (T. and S.) 1948年8月10日西浦方面にて漁獲の成魚全長325、体高135mmを調べた。体は銀灰色の地で、背方が暗色、黒色の斑点は体側以下では多少不判明となり、体側中央に他の点よりも色濃き稍々不規則形の黒斑少數があり、大形で多少目立つ。幼魚や中成魚の如き体に黄褐色味は全くない。虹彩はイシダイと全く同じである。

(107) ヒメジ *Upeneus bensasi* (T. and S.) 1946年11月10日千本沖手縄網に入った中幼魚1尾(全長113mm)を入手した。虹彩は淡紅色で内細輪は白色。従来の岡田・内田・松原3氏(1935)の88図版fig. 2に一致するが、ID.とIID.とにある淡赤色横線は3条宛なるが、濃色で最下方のものは右方の軟条にのみある。C.の上葉は地色が淡黄色で、それに明なるもの3斜横赤線で、最基部には別に赤点よりなる擬条線があるのみである。而して各赤線の右方即ち叉部の方は少しく擬黒色を帯びる。C.下葉は大部分鮮紅色で、先端は淡黄色を有し、次に半円形の淡灰黒色斑がある。P.は淡紅色で基部約 $\frac{1}{4}$ は淡黄色、V.は淡黄色でその中央に1赤横帶があり、第1軟条の大部分も赤い。A.は無斑の淡黄色。下頸の触鬚は鮮黄色で、その中央にgamboge yellowの部分がある(約 $\frac{1}{4}$ 位の長さ)。其他には特記すべき点がない。方言では関西と同じくヒメイチと云う。

(108) トライメジ(ヨメヒメジ) *Upeneus tragula* RICHARDSON 1954年8月23日沼津市営千本水族館で目測全長250mm位の2尾を観察した。これは田中氏水産動植物図説(1933), p. 209の挿絵及びその記載に一致し、体側に6個位の横斑がやゝ不鮮明に存現する。顎鬚はgamboge yellowで鮮明、体側の暗褐色の1条の太い縦帶は頗る顯著に見られる。D.に図示されている暗色帶は濃赤色である。

私は又1956年8月27日志下海岸で1尾(全長96、体長77、体高20mm)を拾得した。その色彩を書けば頭は銀色に桃色を帶び、体側は側線より上方は淡褐色、側線部に淡褐縦走帶が通るが頗る不鮮明〔前記より幼魚の為め?〕。側線より下方は腹迄美桃色に銀光がある。C.は上下両葉共灰白色の地に上葉に4黒帶、下葉に3黒帶がある。頭・体及びV.にある筈の黒小点はこれを認められない。只V.とA.とに痕跡的に暗斑が見られる。ID.及びIID.の濃赤色と白色との帶は認められる。P.は淡黄色、V.とA.は擬白色。顎鬚は黄色(乾くと白くなる)。虹彩は橙黄色である。

(109) スミツキアカタチ *Cepola schlegeli* (BLEEKER) 1946年4月7日志下手縄網に入つ

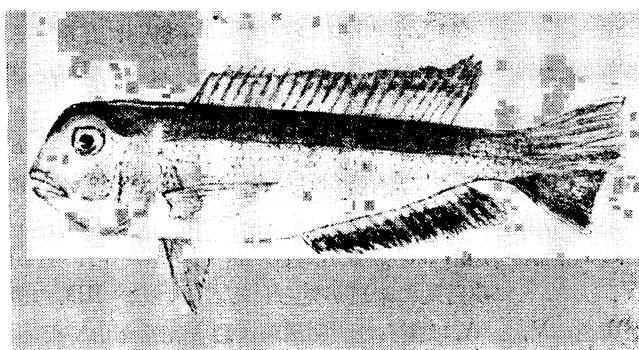
た1点(全長 160 mm), 1946年3月27日土肥沖手縄網(100尋)に入つたた4点(全長118, 124, 141, 203 mm)及び1947年1月31日千本沖の手縄に入つた稚魚(全長 65 mm)を調べた。新鮮色は頭は深桃色, 体は桃色, 各鰓は黄色, 尾端は細くなり少し糸状物が延びる。腹方は帶黃銀白色, 鰓蓋は桃銀色, 前骨と後骨との間は深桃色。体の両側で肛門の大体直上に各1銀色の短横斑が存する。虹彩は銀色で, 少しく桃色を帯びるか或は又紅色の斑を示す。体色はアカタチやイッテンアカタチに比して赤味が淡いものである。

(110) シロアマダイ *Branchiostegus japonicus argentatus* (C. and V.).

アマダイ類の研究は岸上博士(1906—3種説)に始まりJORDAN and HUBBS(1925—1種説), 田中博士(1931—1種3型説), を経て最近に至り入江春彦(1952, 1953)及び落合明(1953)の両氏によつてアカとキアマを同1種中の2亜種として, シロ(シラカワ)丈けを独立種とした。私は外観丈けで云うなら田中博士説を取る。シロアマダイの記載は大体田中氏(1931)の原色図で足りるが, 私は次に稚魚の色を記述する。

1946年12月16日沼津市桃郷海岸で稚魚1点(全長 38.5, 体高 V.部 9.5 mm)を拾得する。色彩は成魚に似るが, 頭上は汚淡紅色, 背方は淡藤灰色で, 側線以下は多少色淡く体側には背方より起れる約14個の不判明な横帶があり, 側線以下は横帶間には多少1銀白点の綫列をなす。頭側, P.基底及び腹方は銀白色, 鰓蓋前骨の下方と尾柄端と C.基底に跨る桃色斑がある。D.は淡色で, 始め6条端は黄色, その他は端部は擬黑色。P.は淡擬白色, V.は白色, A.は基部白色で, 条先端部は擬黑色, C.の上方基底は多少黄色を帶び, 他は淡色で条先部は擬黑色である。虹彩は銀色で上方に帶蒼色斑がある。

(111) キアマダイ *Branchiostegus japonicus auratus* KISHINOUYE, 此亜種について田中氏(1931)の原色図版が公にされているが, 私の実査した個体についての新鮮色は多少異つているから次に報告する。1947年12月30日志下沖1里の手縄網70尋にて同大のアカアマダイと共に漁獲された1尾の中幼魚(全長 230, 体高 P.部 51.5 mm)についてである。背方は額の高部は暗オリーブ褐色, それより体側の側線上方は一様なる暗紅紫色, 側線以下は淡紅色, 背側との境は鮮明で, 胸及び腹方は白色となる。眼先きから吻端えは黄金黄色で光よく, 次に眼の前下方から巾狭き純白の1線が上顎中央に達する〔特徴〕。眼の後方から眼下への1大光黄色の部があり, 鰓蓋前骨と後骨とは黃金色に幾分淡紅色を帶び, 喉に至るに従い白色となる。喉下部中央には1淡黄色の短綫斑がある。P.基底上方に橙黄色の1斑があり, その後縁は黄赤色となる。それにつづく上方に1銀白斑線があつて側線より少し上方に向う。D.は上方端部は黄色, 次にオリーブ黄色, 次に白斑



第5図 キアマダイ中幼魚全長 230 mm 志下沖手縄網にて(著者原図)

(不判明) があり、次に淡灰紅色の1縦帶、次に淡黄色の不判明な1縦帶が通る。P.は殆ど白色で先方は幾分淡蒼灰色の軸を有し、基部 $\frac{1}{3}$ 程は橙黄色を呈する。V.は白く、先端僅に淡蒼灰色を帯びる。A.は大部分灰蒼色で、第2~9の条膜には灰黒色の長味の横斑があり、基部には蒼白色の点列がある。C.は下半灰蒼色、その上縁より上方には5~6条の黄色縦帶があり、各帶の縁には淡紅色の細縁がある。下方の灰蒼色部中にも長味と円形との4黄点を見る。

鰓蓋前骨後縁にのみ小鋸歯がある(特徴)。頭の背中線の褐色細線はアカアマダイより色淡いことは正しいが、その両側に接してキアマでは黄線があるべきなるに本標品ではアカ同様銀白線がある。故に多少キアマとアカとの中間型かもしれぬが、上記中の主なる特徴はキアマに一致する故キアマと同定する。又体側の横帶はアカの如く明瞭でなく数も少なく、僅かに光線により少し見える程度である。これは成魚でない為めか又は新鮮の場合はアカでも不判明なる方が正しいのではないかとも思われる。アカの特徴たる体側にある黄褐色帶は全く存しない。

Résumé

The part seven of this series contains descriptions of life colors of the species nos. 97—111, with some notes on the fishes (several species of *Carangidae*, *Leiognathidae*, *Oplegnathidae*, *Mullidae*, *Cepolidae*, and *Branchiostegidae*) found in Suruga Bay, Japan